永遠と停頓の詩人・井上靖

—青春・太古に響き合う『異国の星』をめぐって—

顧　偉良

1　美の旅程—シルクロードへの井上靖の夢

昭和40年正月元日の朝日新聞紙上に、井上靖は散文詩「ある晴れた日に」を発表した。学生時代に西域への憧れで、中央アジアの一番古い、最も美しい街サマルカンドへ無銭旅行の計画を立てたという。以下は詩の全文である。

学生のころ、私は中央アジアで一番古い街サマルカンドへ行きたいと思った。何日もかかって無銭旅行の計画を立てた。かつてアレキサンダー大王が、ジンギスカンが、チムール大帝が、兵団を率いて、この街にはいったように、とある日没時、私は一頭の驢馬をひいて、シル河の支流沿いにこの街にはいるはずであった。不規則な狭い道路、古い回教寺院、そこを歩いている侵略者や被侵略者の後裔たち。長い興亡の歴史の翳りの中を、私は隊商商人のように歩いてみたかったのだ。

それから三十余年、いまも私はサマルカンド行きの夢を棄てていない。昨年の元旦も一昨年の元旦もそうであったように、今年もまた、今年こそそこへ行きたいものだと思っている。無銭旅行を企らむには既に老いたが、金と時間の工面に、何日かを費やす情熱はまだ残っている。

とある晴れた日に、私は空から天山の麓のその古い都へはいって行くだろう。もはや土に埋もれた石にも、古い城壁の蔓草にも、さして心は動かさない。私はその町で、黒髪や肌の色を異にした父親や、おふくろや、息子や、娘たちが、一つの卓を囲んでいる一家の団欒を見たいのだ。タタール、カラ

カルバリ、タジク、ウズベク、いろいろな民族の血が入り混じった混血児たちが遊び呆けている幼稚園を見たいのだ。私はウズベク共和国国立大衆食堂で、かつてのこの地の覇者たちが食べたことのない大きなメロンを食べたいのだ。(『井上靖全集』第1巻より)

その夢が実現したのは、昭和40年5月～6月(第1回目)、昭和43年5月～6月(第2回目)であった。いずれの旅もひと月かけて、当時のソ連領西トルキスタンを廻った。1回目は、タシケント、サマルカンド、ペンジケント、ブハラ、ドゥシャンベ、アシュハバードを訪れた。2回目は、モスクワ、レニングラード、キエフを廻って、タシケントを起点として、歴史上の有名なフェルガナ盆地に散らばっているシルクロード花やかな町々(アンディジャン、ナマンガン、フェルガナ、コーカンド、レニンスクなど)を旅した。これに続いて、昭和46年、48年、52年、ソ連領の西トルキスタン、オリエントの旅をした。5回にわたる西トルキスタンの旅を記した『遺跡の旅・シルクロード』の「著者あとがき」に、井上靖は、「本書は『遺跡の旅・シルクロード』と題しましたが、この題が完全なものとなるためには中国領東トルキスタンの紀行を併せ収めなければなりません。しかし、目下のところその地帯には外国旅行者は入ることができないので、残念ながら、これは他日に期さなければなりません。」[1)] と述べている。

その後、昭和52年8月、中国対外友好協会の招きで、井上靖は日中交流協会代表団の一員として、初めて中国領の東トルキスタン、つまり新疆ウイグル自治区の砂漠地帯に足を踏み入れた。翌年の5月も敦煌を訪れる。そして、昭和54年10月、55年5月、2回、NHK「シルクロード」取材班に同行して、河西回廊、西域南道を訪れた。昭和40年以来、15年間に渡るシルクロードの旅をし続けたが、この旅を終えた後、紀行文集『遺跡の旅・シルクロード』(新潮文庫、昭和57)、『私の西域紀行』(上下、文藝春秋、昭和58)、及び『シルクロード詩集』(日本放送出版協会、昭和57)、長篇小説『異国の星』(上下、講談社、昭和

59）等、数多くの小説や詩、紀行が刊行された。そして、『シルクロード絲綢之路第二巻敦煌－砂漠の大画廊』（昭和55・6）、『同第三巻幻の楼蘭・黒水域』（昭和55・8）、『同第四巻流砂の道西域南道を行く』（昭和55・10）もある。

新潮文庫『遺跡の旅・シルクロード』の「あとがき」に、井上靖は、「この十五年ほど、多少意識して往古の西域の地、今日の言い方で言えばシルクロード地帯を旅している。中国領の東トルキスタン、ソ連領の西トルキスタン、アフガニスタン、パキスタン、イラン、イラク、トルコ、エジプトなどの辺境地帯、砂漠地帯の旅である。（略）特に五十五年の旅は、私にとっては生涯での一つの事件であった。ヘディン、スタイン以後、初めての外国人として、この地帯（西域南道－引用注）を何日間かに亘って、ジープで走ることができたのである。」[2)]と意味深長に述べている。その思いは、司馬遼太郎との対談の中でも次のように触れられている。学生時代からホータンへ行こうと決意し、それから40何年か経っているが、初めてそこを訪れた時に、日本から飛行機で飛んで来たのではなくて、40何年かけて歩いてきたのだ[3)]、と。まさに、歩きつづけたという一行に学生時代からの想いが凝縮されている。

井上靖は、京都大学に在籍した頃、西域研究に関する論文に魅力を覚え、耽読していた。遥かなる西域への憧れは、日本における西域研究とも深く関わっている。その源を遡れば、明治時代に行われた大谷（光瑞）探検隊の中央アジアの踏査、その後（明治末から大正、昭和初め）に起こったシルクロードのブームに関係している[4)]。内藤湖南、桑原隲蔵、白鳥庫吉、藤田豊八、石田幹之助などの東洋史学者は、早くから日本の文化と西域との関わりに関心をもったが、井上靖の言葉で言えば、それらの東洋史学者は、「日本の文化の根源にある問題を解明しようとした」[5)]のである。井上靖の西域への憧れは、多方面であるが、その主な一つは仏教美術への関心にあったと思われる。「敦煌と私」、「敦煌千仏洞点描」、「平山郁夫氏の道」[6)]などの評論を見ると、もはや、西域への憧れといった単純なものではなく、仏教美術に対する彼の慧眼を窺うことができる。

シルクロード、特に西域南道は、何よりも仏教伝来の地として仏教美術の宝庫

であった。小文の冒頭にその仏教絵画の伝来と中国の道教信仰との接点について振り返って考えてみたい[7]。まずは『後漢書・西域傳第七十八・天竺』（中華書局）における興味深い記述を見てみよう。《世傳明帝夢見金人，長大，頂有光明，以問羣臣。或曰：「西方有神，名曰佛，其形長丈六尺而黄金色。」帝於是遣使天竺問佛道法，遂於中國圖畫形像焉。楚王英始信其術，中國因此頗有奉其道者。後恒帝好神，數祀浮圖、老子，百姓稍有奉者，後遂轉盛。》[8]。浮圖（または浮屠）、梵語“Buddha”の音訳、即ち仏陀のこと。伝えによると、仏陀は偶像崇拝には反対であったが、皮肉なことに、異郷の地で仙人として老子と共に祀られることになった。古代中国では秦皇漢武の時代より、不老長生の術と神仙の道を求め、殊に仙境楼台を好む風習が強く、仏陀がまるで仙人の如く祀られるのも頗る風習に相応しいものであった。史書にも屢々記載されているが、殷代（紀元前1750～1100年）、周代（紀元前1100年～250年）には、壮麗なる青銅器の動物紋様や壁画が既に発達しており、前漢（紀元前205～紀元8年）の時代には西域との交通が開かれ、インド仏教絵画の伝来により、後漢（紀元25～220年）の時代において道教と仏教は同源にありと信じられ、殊に仏画への厚き信仰が生じたという[9]。その間、幾多の争いも起きていたと予想されるが、後に大規模な寺院や仏像や石窟の造営が北魏（紀元386～534年）の全盛時代に行われ、それは、後漢時代における仏画の厚き信仰との密接な関係に関わっていたと思われる。敦煌石窟壁画の保護に生涯の精力を注いだ常書鴻氏は、こう語っている。「中国の仏教芸術は、北魏時代の外観より中味を重視した気力みなぎる芸術から始まり、隋代の華麗で堂々とした作風や仕上げの緻密さを経て、人物と山水、配色と構図、内容と形式、配置と筆使いの変化など、すべての面で唐代は最高の極に達した。」[10]、と。

中国美術史家のマイケル・サリバン氏は、著書『中国美術史』の中で、「ある民族の原初が何であったかを物語る伝説は、たいていその民族が何をいちばん重要視しているかを解き明すヒントを与えてくれる。」[11]と述べているが、漢民族の原初を一番よく物語ってくれるのは、恐らく殷周時代の青銅器だったので

あろう。夏は幻の王朝だったが、殷周の時代には天地山川の神々、動物や怪獣への畏敬や崇拝が最も敬われており、万物系譜の中で人間が一番小さな部分だったのである。更にサリバン氏は、中国文明について次のように指摘した。「人類の歴史のうちで大自然のかたちとしくみと、それに対する人間の謙虚な傾倒とがかくも大きな役割を演じている文明はほかにあまり例を見ない。」[12)]、と。サリバン氏は、文明の経路を踏まえてそれを指摘したと思うが、そういった文明の経路が、紀元前の彩陶、特に青銅器に見られる煩雑な動物紋様で既に浮き彫りになっていた。したがって、自然の神々への畏敬、崇拝から生まれた神仙思想や道教信仰が仏教伝来と共に仏画への信仰に結ばれて、始めて絢爛たる敦煌各地の仏教美術が誕生したのだとも言えよう。

仏教伝来に伴う仏画等の様式は、様々なルートを通じて日本に伝わり、その西域からやって来た仏たちにより、大和に雅やかな仏教芸術がもたらされたのである。千数百年以上の歳月を経て今日において、「日本の美と日本文化の源流」が敦煌にあった[13)]、と断言した平山郁夫氏の慧眼も、すなわち仏教東漸の道、シルクロードに法隆寺と敦煌との接点を見ていたからである。井上靖が学生時代からシルクロードへの関心を持ち続け、とりわけ敦煌の仏教美術に示したその並々ならぬ情熱は、日本文化と深く関わった文明の経路に対する一種の謙虚な態度がその根底にあったものと考えられよう。その作家としての眼は、必ずしも「超歴史的」ではなく、寧ろ歴史的想像力を備えていると言った方が適切であるかも知れない。夥しい歴史紀行や仏教美術をめぐる井上靖のバランスの取れた語り、その調和の感覚は、もともと仏教美術から学んだ調和の美として身につけられ、それらは井上文学の根底に浸透しているのである。歴史、文学、美術とも深く関わる井上靖とシルクロードの旅について、この短い一章で語り尽くされた筈はないが、改めて他の機会に論じたい。

2 『異国の星』の構成

『異国の星』は、「ギルギット通信」、「カシュガル日記」、「ヒマラヤの月」、「砂

漠からの手紙」(上巻)、「アムールの町」、「インダス渡河点」、「玉門関ノート」、「天山の麓にて［第一信］［第二信］」(下巻) とあるように、実に壮大な散文詩編である。この作品は、単にかき集めたものではなく、井上靖は己の人生の中で歩んだ場所、戦争体験、また出会った人に縦横無尽に触れながら、過去の思いを呼び起こして死者たちに語りかける。或いは記憶の中で青春を蘇らせて現在の自分、ないし太古の歴史と対話する。中では、ミステリ風のもあり、歴史上の人物は勿論のこと、様々な語り手も登場してくる。正に青春と歴史に響き合う多彩なテクスト性が構成されている。

『異国の星』は、勿論独立した作品であるが、中には旅行中のメモを作品化したのもある。井上靖は、中央アジアの旅、NHK「シルクロード」の取材中に食事や寝る時以外は、どこに行っても、片時もノートを取るのを忘れなかったと伝えられている。メモ魔と呼ばれる程であった。『井上靖歴史紀行文集』(全4巻、岩波書店) の中央アジア、シルクロード紀行に関する部分は、殆どメモ形式から取った記録であると言っても過言ではない。学生時代から井上靖の愛読した司馬遷の『史記』や『大唐西域記』(12巻) は、正に後世に伝わる歴史の記録としての価値があるが、彼はそれらの書物にかなり影響を受けていると思われる。従ってメモ形式の「記録」は、井上文学においてデッサンと同様に重要な意味を持っている。福田宏年は、《「異国の星」は何章かから成り立っているが、すべて、山や砂漠のはるかな僻遠の地から、時空をへだてて心を許した誰かに語りかけるという形を取っている。それは必ずしも、はっきりした形の書簡でなくてもいい。今は亡き友人への語りかけであってもいい。》[14] と述べている。本稿では、この作品をすべて取り上げるのは不可能だが、青春・太古に響き合うという視点から、「玉門関ノート」、および靖自身の戦争体験に基づいて書かれた「砂漠からの手紙」の中の一つ、「ある夜の兵士へ」について考えてみたい。

3 「玉門関ノート」篇

漢の武帝の時代に、異民族との交渉のため、玉門関は、陽関と共に、西域南道・北道に置かれた2つの関門である。そこは、軍事基地でもあり貿易基地でもあった。紀元前1世紀から、漢王朝は、于闐(うてん)国に西域都護府を設け、西域一帯を管理した。歴史上の于闐(現在の和田(ホータン)、闐の発音は田と同じ)は、疏勒(カシュガル)、安西、亀茲と共に「安西四郡」と呼ばれた。その一帯には、于闐国を含めて36カ国の小国があったが、多くの小国は、于闐国の勢力拡大でその支配下に置かれるようになった。『後漢書』に収められている「西域伝」には、その36カ国を含めている。天山南道は、すなわち幻の王国といわれるローランや有名なニヤ遺址、ホータンなどを含めた東トルキスタンの地域である。未だに多くの謎に包まれている。古代の于闐国は、紀元前1世紀に仏教が中国に伝来した最初の地域であり、そこから中国内地へ仏教が伝っていくわけであった。敦煌はその要衝地にあったのである。そこは、“絲綢之路”(シルクロード)の西域南道の交通要所でもあり、貿易地としても栄えていたが、15世紀の頃、海上貿易が盛んになるに連れて、古代シルクロードとしての貿易地は衰えていった。

『井上靖歴史紀行文集』には、紀行文「玉門関、陽関を訪ねる」が載っているが、それによると、井上靖は、1978年5月、中国に招かれて、敦煌を5日間滞在したが、そのうち1日をさいて、玉門関、陽関の址を訪ねたのである。その紀行文には「玉門関ノート」が登場していないが、『異国の星』の「玉門関ノート」篇では、作者と見られる「私」は、こう語っている。「このノートを作成した頃は、“玉門関”、“陽関”の二つの名称には、ひどく神経質になっていた。それに関する2、3行の記述でも一応眼を通さずにはいられなかった。そのために図書館に通ったり、古本屋を漁ったりしたものである。そういった意味では、この古ぼけたノートは、青春の一時期のかたみであり、大袈裟な言い方をすれば、私の青春の心が小さいペン字で刻まれてあると言える。今日、そうした中国の玄関口の一つである玉門関を訪ねることになったので、その古いノートを携行して、そのノートに玉門関附近の風を当ててやろうというわけである。」、

と。作品では、作者は直接語る代りに、ノートを登場させ、それを媒介にして語る。学生時代の記録であるその古いノートとの対話は、過去の青春との対面でもある。「玉門関ノート」篇は、玉門関址、陽関址に向かう１行の対話で構成されるが、その語りの特徴から、まずはその内容構成を見なければならない。

玉門関は、敦煌西北85キロの地点にあり、そこを訪ねる日の陣容は、中国側の同行者21名、ジープ６台、専属のコックまでついてくれた。途中、「私」は懸命に尋ねる。—「玉門関街道といったものはなかったでしょうか。」—「玉門関と敦煌の間を、毎日のように、たくさんの人が往来した時期があった筈ですが。」、と。一帯は荒涼としたゴビ砂漠で、１時間半ほどかけて、漸く玉門関址に辿り着く。「私」は、古いノートを開けて見る。唐の詩人岑参の詩「玉関、西望すれば腸断つに堪えたり。況んやまた明朝は、これ歳除なるをや。」(「玉関にて長安の李主簿に寄す」) の一節が写されている。そして、「ノートを閉じて、ゆっくり立ち上がって、関址の方へ歩いてゆく。岑参は岑参として、私の場合でも、この地に立てば、多少の感慨はあるというものである。玉門関に熱を上げた時期から、いつか半世紀近い歳月が流れている。玉門関に熱を上げていた青春時代は遠く去り、いま七十代の半ばにして、ここに立つことができたのである。」と語っている。マッチ箱のような遺跡を眺めて、「私」は古いノートを砂漠の砂の上に置いて、頁をぱらぱらとめくって、玉門関址に降り注いでいる同じ陽光を当ててやる。その挙動に注目した同行者の一人は、—それは何ですか、と聞いた。そのノートを手にとって捲ってみると、「—おや、敦煌から玉門関へかけての地形の見取図が書いてある。大方盤城も、小方盤城も、陽関も、長城の址も、みんな記されている。党河、三危山、月芽泉、それから南の山脈も、北の山脈も、中央の砂漠も。」と感心した。

古いノートには、玉門関を中心にした地形の大雑把な見取図が描かれている。しかも長城線の見張台なるものの内部の見取図も書かれ、その横に、「南がわに兵士の部屋、壁に沿って炉、そこから階段を上って見張塔へ。建物はひぼし煉瓦、周囲を土でかためている。」と、そんな説明がついている。何時の間にか、

古いノートは一行の話題となって、その時点から大きな役割を果たすのである。

玉門関址を見た後、一行は峰台に向かう。峰台とは、もともと玉門関、陽関を内部に入れて、大きくそれを包んでいた国境線のところどころに配置されていた望楼である。長城の址は国境線であった。関内も関外も砂漠化して荒涼とした眺めである。正に“上に飛鳥なく、地に走獣なし”といった不毛の地である。一行は、狼煙について話し合ったが、一体どういうものが燃やされたかは不明であった。古いノートには、「—狼煙、狼烟、狼火、狼燧。狼との関係を調べること。」と書いてある。そこで、「私」は、狼煙に因んで非常の時の夜に起こった戦禍の状況をいろいろと実に細かく想像したりする。「戦争というものは、この二千年前あたりで、この地球上からなくすべきであったのである。」とも考える。そして、玉門関遺址について聞いたが、満足な答えは出なかった。結局、古いノートに記した武帝の命により派遣された李広利の大宛(だいえん)国征伐についての物語を読み上げる。勿論、『史記』に記されたこの史実についても未だに定説がないが、読み上げられたその物語は、言わば作者自身の想像物語であった。更に、『後漢書・班超伝』に記された班超という歴史人物についても、学生時代に記した文章を読み上げる。

一行が立っている場所は、玉門関址だったが、古いノートに記された文章を読み上げられると、みんなその文章に気を取られてしまい、熱心に耳を傾ける。班超のあとには、インドに求法の旅に出る法顕、玉門関をくぐった玄奘三蔵も登場してくる。そして、ノートに写した『大唐西域記(だいとうさいいき)』(巻12)の一節「大流砂」を読み上げる。「—此れより東行すれば大流砂に入る。沙は則ち流漫聚散して風に随う。人は行くに迹なくして遂に路に迷うもの多し。四遠は茫々として指す所を知るなし。是れを以って往来するものは遺骸を聚めて以って之を記す。(略)私は声を上げて読んだ。声を上げて読んだのは自分のためである。若い私を魅了した流砂地帯の描写である。(略)ノートは私から陳さんの手に渡った。ノートには原文も併記してあるので、それを陳さんに読んで貰うためである。陳さんも声を上げて読んだ。(略)ノートはそこに居る人たちの手に、順々に渡され

て行った。」、「私は読み終ると、ノートを陳さんに渡した。陳さんは陳さんで、彼もまた前と同じように、一種の独特の調子をつけて、ノートに記されている原文を読み終ると、ノートを王さんに渡して……」、と。このように、読み上げる私も、陳さんも、王さんも年齢の差を忘れてしまい、互いにノートに写された「大唐西域記」の文章に魅了された。やはり「大唐西域記」は、実際の玉門関址に立ち寄って読み上げると、抜群の臨場感を持つのだろう。

玄奘三蔵の後には、唐の詩人・岑参が登場してくるが、古いノートには、他に玉門関をくぐった歴史上の人物が記されていない。玉門関址を見た後、陽関址に行くことになっているので、「私」は感謝の意を伝えたが、「―別に貴方のために陽関行きを決めたわけではない。ノートですよ。貴方が若い時作ったという、そのノートのために陽関行きを強行することになったんです。ノートの表紙に“玉門関、陽関”と書かれてありますね。それで玉門関だけでは片手落ちになると思ったんです。」と、同行の陳さんは冗談で言った。その後、一行が陽関址に向かうが、そこを見てから敦煌に戻ったのは、夜八時過ぎであった。

上記のように、幾千年もの歳月の流れの中で、古の玉門関、陽関に関わった物がすべて消え、風化した遺址だけが残っている。多感な学生時代も過ぎ去り、残った一冊の古いノートで、かつて西域にかけた青春の夢が玉門関の遺址によみがえったのである。凡そ西域に足跡を残した歴史上の主要人物は殆ど出ており、一行の対話は、古いノートをめぐって縦横無尽に語り合い、まるで太古の時代に戻ったかのように時空を超えている。学生時代の夢を写したその古いノートは、かくして過去と現在の時の中で青春の光を放っている。

4 「ある夜の兵士へ」

『異国の星』の中で、「砂漠からの手紙」の一章があるが、すべて今は亡き人々への書簡が書き込まれている。その中で「ある夜の兵士へ」[15] の手紙は、日中戦争時に出征中の井上靖の一命を留めてくれた名も知らぬ兵士に送ったものである。井上靖は、時の永遠さを見据えた上で、過去の青春の一こまを焦点にし

ている。大まかな内容をまとめると、以下のとおりである。

《私はいま中国の辺境、タクラマカン砂漠の南の縁に位置している、チェルチェンという小さい集落に来ております。私がどうして今、ここで貴方に手紙を書こうという気になったか、そのことについて簡単に触れておきましょう。私はこの集落に入ってから、“もしもここで”という詩を書きました。もしも、ここで自分が死んだら、砂漠の沙棗の林の中に寝かされ、やがてミイラになるだろう。家の者も来ないし、誰もやって来ない。さっぱりしたものだ。ただミイラになる、—そういった内容の詩であります。—もしもここで俺が死んだら。という仮定を内部に持った思いは、自分にとって初めてのものではないという考えが頭を擡げて来ました。確かに、どこかで、“もしもここで俺が死んだら”—こういう思いに身を任せたことがあるに違いないのであります。何回もこの思いを頭に置いて考えている時、ふいに雪を浴びている無蓋貨車の中のことが、貴方のことが思い出されて来、堪らなく貴方にお便りを差し上げたくなったのです。

私が初めて貴方と言葉を交したのは、京漢線の元氏という駅に停車した無蓋貨車の中で、時刻は深夜に近かったと思います。私は元氏駅から東南四キロの、同名の小さい集落に駐屯していた輜重隊に所属する二等兵でしたが、その朝、突然、部隊は南方一二〇キロの順徳に向けて、三泊四日の行軍で出発することになり、脚気衝心で苦しんでいた私は部隊から離れて、後方の石家荘野戦病院に送られることになりました。

私が初めて第三者として、自分がそれまで所属していた部隊を眺めたのは、高台になっている元氏駅のホームからでした。見渡す限りの雪の大平原のただ中に置かれた馬と車輛の部隊は極めて小さく、無力に見えました。私は部隊が全く見えなくなるまで、一時間近く、雪を浴びてホームに立っていましたが、それは部隊と別れを惜しんで立っていたのではなく、部隊が無力に小さく見えたその瞬間に、心臓に故障が起って、一歩も足を踏み出すこと

ができなくなっていたからです。その日一日、私は駅で列車を待ちましたが、雪のためか列車は来ませんでした。私は兵隊が焚いてくれる飯盒の飯を二回食べ、時折襲って来る不気味な心臓の発作と闘っていました。夕方、列車は入って来ましたが、私の割り込む余地は全くないらしく、何時間か遅れて、夕方着く筈の列車が十時頃、ホームに入って来ました。それから更に一時間ほどして、最後の無蓋列車が入って来ました。

—頼む。乗せてくれ。なお手を貨車の箱の方に突き出しながら、列車と共に歩きました。と、その時、私の手は貨車に乗っている一人の兵隊に握られ、上に引き上げられました。私は夢中で列車の箱の縁にしがみつき、体を半ば宙に浮かせて、箱の中にのめり込みました。もし貴方の手で、あの無蓋貨車の中に引き上げて貰えなかったら、おそらく今の私はないと思います。元氏の駅の土間で、あの烈しい寒さに半ば凍りつきながら、心臓発作で倒れていたことであろうと思います。

あの暗い悪夢の時代は遠くさり、いま私は同じ中国の新疆ウイグル自治区の砂漠の集落に入れて貰って、貴方に初めてお礼の手紙を認めさせて貰っています。》

上記のように、70代に入った井上靖は、30代の自分の暗黒な青春を「ある夜の兵士へ」の中に綴っている。井上靖は、昭和12年（1937年、30歳）9月3日、日中戦争に充員として応召。月末、第三師団野砲兵第三連隊輜重（しちょう）兵中隊の一等兵として北支方面に出陣する。11月、脚気等の病により野戦病院に収容される。翌年の1月19日、内地送還により大阪港上陸[16)]。井上靖は、自分の戦争体験について、幾つかの作品の中で断片的に触れているが、上記の文章は、語られた戦争体験の中で最もリアルな文であろう。死の恐怖に晒される中で示されたのは、必ずしも傍観者としての態度ではなく、寧ろ生命の虚脱状態に陥った途方もない無力感だったと思われる。まるで映画の中に出てくるワンシーンみたいに、真夜中に運命の序列の無蓋列車がプラットホームに入ってきて、名も知ら

ぬ一人の兵士から、救いの手を差し伸べてくれた。正に命を運んでくれたのである。因みに、井上靖の詩「元氏」の中にも運命の序列の思想が示されている。

上記の文に、青春のひとこまが刻まれてあるような一種の独特なリアリティが感じられるが、そこには、どす黒い血のついた死のイメージしか存在しない。ところで、“死の海”と呼ばれたタクラマカン砂漠の集落で、“もしもここで”ならば、との思いに過去の想いが重なって、詩「もしもここで」が誕生したのである。では、その詩を見てみよう。

——もしもここで俺が死んだら、
十時間に亘った砂漠とゴビのドライブが終って、漸く風のしずまった薄暮の集落に辿り着いた時、私は思った。
——もしもここで俺が死んだら、
その夜、寝台の中でもう一度、私は思った。死ねばあとは簡単、砂漠の沙棗の林の中に寝かされて、ミイラになる。地獄もなければ、極楽もない。沙だけの世界だ。家の者もやって来ない。誰もやって来ない。ただミイラになる。
——もしもここで俺が死んだら、
その夜の睡りは静かだった。未だ曾てない安堵の思いの中で、私は睡った。[17)]

沙だけの世界でミイラになるという想定。死の恐怖が全く感じられず、安堵の思いの中で私は睡った、と。砂漠の集落で重なった死の想いは、それだけ井上靖にとって身近なものだったのであろう。それは、過去に起った出来事が記憶の中に刻まれ、時間の射程の中でそれと向き合っている。半世紀以上の歳月が経っているが、当時の出来事と死の想いが砂漠の中で蘇って、詩人に豊かな詩想を提供してくれる。詩は記憶の装置である。歳月の流れの中で、雑多な感情が洗い浚いにされ、過去のひとこまひとこまが刻まれている。そもそも井上靖は、ある関係性を捨象して自分を語ることに熱中するような詩人でも作家で

もないと思う。そのような自己を中心とした語りは井上靖とは無縁であろう。井上靖の詩には、永遠と停頓の思想があり、その孤高なる精神というものを規定する何物も存在しない。それは、社会に準じる道徳や思想や主義よりも、もっと高く深いものであろう。詩人の中で出会った場所、とき、もの、ひと、想い、出来事が、すべて記憶の装置にとどまる。これこそ詩人の秘密箱である。しかもそこは、決して感傷的な世界ではなく、寧ろ凛々しい「散文律」の世界なのである。井上靖自身の言う文章のリズムというものがそれに当たると思う。そのリズム感を持つ文章は、きらきらと独特な生命感を放つ。多彩な『異国の星』のテクスト性も、このように青春と歴史に響き合う文脈の中で構成されている。

以上、「玉門関ノート」と「ある夜の兵士へ」について見てきたが、この二章は、井上靖の中で鮮明な対照となる二つの青春を語っていると思う。前者は、学生時代に自分の夢を託し、後にそれを実現したという悦びが伝えられているが、これに対し後者は、青春の思い出にどす黒い血のついた死のイメージが付き纏い、詩人の中でそれを忘れることなく、過去のひとこまとして永遠に刻まれている。正に詩人として、無数の命を奪った暗黒な戦争時代を、辛辣な眼で眺めている。

＊　＊　＊

井上靖にとって西域は、決して辺境ではなく、そこは歴史上の冒険家たち（張騫、班超、玄奘など）が青春をかけた場所であり、また仏教伝来の地として美の宝庫だったのである。その冒険家たちへの想いや仏教美の追い求めは、数々の文章の中に記されている。そして、数々の歴史小説の中で歴史のひとこまひとこまが、１枚１枚まるで絵巻物のように描き出され、様々な歴史的出来事を通して、悠久な時の流れの中で躍っているリアリティを持った人間像が作り出された。戦後日本の文学の中で全く独自の文学世界を切り拓いたのである。学生時代から西域に関心を持ち続けた井上靖のような作家は、これまでの中国には居なかったが、20世紀80年代以降、張承志[18]という若手の作家が誕生した。彼によって、初めて中国内陸部の西域（中国では「内陸亜州」と呼ぶ）に関す

る小説や詩歌が創作された。日本でも張承志の小説などが翻訳され、注目された新鋭の中国人作家の一人である。

〔注〕

1）井上靖『遺跡の旅・シルクロード』新潮社、昭和52年

2）井上靖『遺跡の旅・シルクロード』新潮社文庫、昭和57年

3）井上靖・司馬遼太郎『西域をゆく』文春文庫、平成10年

4）井上靖「歴史の通った道」、『井上靖歴史紀行文集』第2巻、岩波書店、平成4年

5）シルクロードは、中国から古代ローマにまで届いていた“絹の道”であり、そこは、「インド文化やイラン文化の東伝にとっての“とび石”であり、ギリシアからアジアに向ってうちこまれたヘレニズムのクサビの先端でもあった。」（松田寿男「訳者のことば」、『楼蘭　流砂に埋もれた王都』、A・ヘルマン著、松田寿男訳、東洋文庫）との見方もあるが、その解釈には様々な意味合いが込められている。この一本の“絹の道”、市場の道でもあったシルクロードをめぐって世界の眼が集められたのは、19世紀末から20世紀の初頭にかけて「発見の時代」であった。シルクロードに関する古代の遺跡が次々と発見され、世界の歴史学や考古学の学界を驚倒させたのである。西本願寺門主大谷光瑞師は、明治35年（1902）8月、ロンドン旅行の際、その帰途を利用して、一行5人で西域の遺跡を訪ねた。一行は、カスピ海沿岸のバクーに入って、サマルカンド、コーカンド、カシュガル、ヤルカンド、タシュクルガンを経て新疆内地へ、終着点の西安に辿り着いたのが、明治37年(1904）2月のことであった。2回目は、明治41年6月から明治42年10月（1908～09）、3回目は、明治43年から大正3年（1911～12）までの計3回で中央アジアを踏査した。昭和12年（1937）、有光社より、大谷探検隊の中央アジア踏査を詳細に記した報告書『新西域記』（上下巻で重さ13キロ）が刊行され、漸く大谷探検隊の全貌を知るようになった（『大谷探検隊　シルクロード探検』（長澤和俊編、白水社、1998年）を参照）。ただし、大谷探検隊の中央アジア踏査は、必ずしも純粋な学術的目的ではなく、参謀本部の意向で働きかけた諜報活動をも行っていたのである。その辺りの事情は、護雅夫氏の解説「シルクロードと日本人」（『シルクロード《今と昔》』〔下〕、人民中国雑誌社・小学館共同編集、徳間文庫、1987年）に詳しい。なお、大谷探検隊の持ち去った敦煌石窟の文物は、すべて日本に持ち帰ったのではなく、一部は当時の日本植民地だった旧満州の旅順、朝鮮の地にも持って行かれ、そこから日本へ運ばれるのを待っていたが、日本の敗戦により、それらの文物は現地に留まり、旅順博物館には、現在も大谷探検隊の持ち去った文物が残っている。

6）『井上靖エッセイ全集』第4巻、第5巻、学習研究社

7）例えば、傅抱石（ふほうせき）「中国古代絵画之研究」、「論秦漢諸美術与西方之関係」、「日本法隆寺－遠東三大芸術之一」（『傅抱石美術文集』、上海古籍出版社、2003年）などの諸論において、中国の仏教芸術の発達と西域との関係について言及されており、傅氏の美術史造詣の深さを窺うことができる。中国国宝級の画伯、傅抱石（1904～1965）は、戦前の帝国美術学校（昭和4年開校、現武蔵野美術大学）に留学。金原省吾氏に師事、東洋美術史を学ぶ。1935年帰国、南京の中央大学に教鞭を持つ。建国後、江蘇省国画院院長、中国美術家協会副主席を歴任。その娘の傅益瑶画家も、1979年日本留学へ、武蔵野美術大学大学院を経て、東京藝術大学で平山郁夫氏に師事し、現在も日本で活躍中。

8）後漢の明帝（めいてい）（劉庄、永平1～18年〔紀元58～75年〕）は、月氏国（げっしこく）（大夏、仏教伝来はそこから中国に広がる）に使者を送り、仏典や仏像を収集させる。永平11年、河南の都、洛陽に古代中国最

初の仏教寺院、白馬寺を造営、その寺院の壁に「千乗萬騎繞塔三匝圖」を描かせた。中国最初の仏画として有名。（傅抱石「中国絵画変遷史綱」、『傅抱石美術文集』など参照）

9）潘天寿（1898～1971）『中国絵画史』（團結出版社、2006年）を参照。民国期の名著で待望の復刻版。潘氏は、若い頃、弘一法師（李叔同、1906年9月東京美術学校に入学、西洋画科に学んだ最初の中国人留学生。）に師事。1933年に上海美術専科学校に教鞭を持つ。建国後、浙江省美術学院院長、中国美術家協会副主席を歴任。

10）常書鴻『敦煌と私　石窟芸術とともに生きた四十年―』、何子嵐・鈴木久訳、サイマル出版会、1986年
常書鴻（1904～1994）の名は、敦煌石窟芸術を語る上で忘れてはならない人物の一人である。杭州の西子湖畔に生まれた彼は、1927年にフランス留学へ、リヨン国立美術専門学校を卒業、パリの高等美術学校に学び、新現実主義の大家ポール・アルベル・ルノアールに師事した。ある日、常書鴻は、偶然にセーヌ川の岸辺の古本屋でポール・ペリオ編集の『敦煌図録』（全6巻）を見つけ、敦煌壁画の風貌を知る機会を得、祖国へ帰ったら、民族芸術の宝庫である敦煌へ行くことを決意した。1936年、留学青春を終えた常書鴻は、帰国の途につく。1942年、日中戦争のさなかにあった中国で、初めて国立敦煌芸術研究所準備委員会が設立された。翌年、常書鴻は、初代の国立敦煌芸術研究所所長に任命され、後に敦煌文物研究所（1951年改称）所長として、数10年間にわたり、敦煌石窟壁画の修復模写に生涯の精力を注いでいた。井上靖は、『敦煌の風鐸』（常書鴻著、秋岡家栄訳、学習研究社、1982年）のまえがき「常書鴻氏と私」の中でこう語っている。「四世紀に第一窟が営まれ、その後約一千年に亘って掘りつがれて行った敦煌莫高窟、そこに包蔵されている夥しい数の塑像と壁画は、砂漠のただ中にあるにも拘らず千数百年の風雪に耐えて、その不滅の価値を今日に伝えている。ふしぎなことであるが、それにはそれだけの理由がある。長い歳月に亘って戦乱の時は戦乱の時で、平和な時は平和な時で、そこを聖地と見る多勢の人たちの信仰心によって守られ、絶えず降り注ぐ鳴沙山の砂によって守られ、そして今世紀になってからは、氏の献身的情熱によって守られたのである。」、と。規模の最も大きい敦煌莫高窟の4万5千平方メートルの壁画には、4世紀から14世紀にいたる一千年以上の仏画作品が保存されており、正に世界の芸術宝庫でもある。敦煌石窟壁画の保護に歴史的な使命を果たした常書鴻の名は、永遠に敦煌芸術史の上で刻まれていく。

11）マイケル・サリバン著『中国美術史』新藤武弘訳、新潮選書、昭和48年

12）注11）に同じ。

13）平山郁夫『敦煌歴史の旅　シルクロードに法隆寺をみた』光文社、平成元年

14）福田宏年「解説」、『異国の星』下巻、講談社文庫、昭和62年

15）井上靖『異国の星』上巻、講談社、昭和59年

16）藤沢全「井上靖年譜」、『井上靖　詩と物語の饗宴』「国文学解釈と鑑賞」別冊、至文堂、平成8年

17）井上靖『シルクロード詩集』日本放送出版協会、昭和57年

18）張承志―1948年北京生まれ。回族。名門の清華大学附属高校卒業。文化大革命のさなか、「紅衛兵」の命名者でもあった（張承志『紅衛兵の時代』岩波新書）。1968年から4年間、内モンゴル草原で牧民生活を送る。初期の代表作『黒駿馬』（1982）、小説集『老橋』、『北方的河』、『心霊史』など多数。

＊討議要旨

郭南燕氏は、発表タイトル「永遠と停頓の詩人・井上靖」の「停頓」という語には、どのような意味がこめられているのか、と尋ね、発表者は、長い歳月を経てもなお光を放つ、時間を超越した存在というニュアンスを含めた、と答えた。

王益鳴氏は、資料に引用されている仏教絵画伝来と道教信仰の融合説には時代的異同があるのではないか、参照した資料を再検討すべきではないか、と提案した。